

Title	懷徳堂と獨創科學者麻田剛立
Author(s)	羽倉, 敬尚
Citation	懷徳. 1969, 40, p. 81-98
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90476
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

懷德堂と獨創科學者麻田剛立

羽 倉 敬 尚

浪華府學懷德書院が約一世紀半の間商都の地に、藩學とは異なつた教育機構の下に、定住の町人の庶民階層や、駐在した武士階級や更に遠國から風を聞いて來つた好學の徒に、各々適應した課程によつて授業したことは、その影響頗る廣汎、後世への遺響も大きく、更にその學が根抵となつて、各種の部門に發展進向したことも窺われる。私はさきに本誌に書院の學と醫家並びに醫學について聊かかかる一展開面をあげておいたが、ここに間接ながら書院の學に培われたと言ひ得る、そして遂に異彩ある成果をあげた近世科學者の俊傑麻田剛立について述べよう。

一、剛立の傳記書

剛立は西陲九州の現大分縣豊後ノ國杵築（キツキ）藩儒綾部氏の第四子である。剛立一代の業績は專攻した天文星曆の一部門に於て若干の著述を貽し又門弟を幕府に

推舉して改曆に參與せしめたことに依つてその學問の深淵さをも窺われるが、これらを網羅集大成する傳記書は出來ておらぬ。漸く昭和十七年その郷里大分縣小野精一（號龍膽）が前年九月大分放送局から數次にわたりその略傳を放送した際の原稿を基礎として同地に於て小冊の略傳（四六版八六頁、非賣品）を出版したのが唯一のものである。これはこの約二十七年前の大正五年十二月剛立の遺功が追褒せられ贈從四位の榮光を受けたことが動機となつてその後著者の苦辛博搜によつて始めて刊本にまとめられたもの様である。かくの如く剛立は死後不運人で、その後、同郷から出で、中には同學切嗟した間柄であり、本文にも後出の三浦梅園・脇愚山・帆足萬里等に比して寔に薄倖、謂わゆる「顯晦ソノ揆ヲ一ツニセズ」の觀がなされる。

思うに剛立はその研鑽執心が中年郷を離れて大阪でなされそして大阪で終り而かもその裔孫續がずその遺書等

傳わるもの少いの因るのであろう。要するに後世その一生の業績をまとめるに困難な地位にあるのである。この観点から上述の小野氏略傳は實に苦心の勞作である。

この以前に求められるまとまった傳は唯大阪市天王寺區夕日ガ丘淨春寺の墳墓の文が重要資料である。これは懷德書院學主中井竹山の長子曾弘(號蕉園)の撰作で墓石四面にわたり約五百字近い長文で、作文者曾弘は初めに自分を「剛立ノ友人竹山ノ子」と言っておる。竹山は剛立の兄(ヤス)胤(號富阪)の畏友で剛立より五歳の年長且つ大阪學校書院學主の大儒更に剛立には出版以來の受恩者である。剛立は出版し先づ兄の妥胤の推舉紹介で本町の竹山の許でワラジをぬいでおる。當時の見を以てすれば、筆者曾弘はが竹山を剛立の友人としておるのは故人に對し自らを、更に父をも謙讓の地位に置いて、深厚の敬意を致し慎重の態度で執筆した様に見られる。この撰文者曾弘性銳敏今孟子の稱を獲、壯年詩賦に長じ、一宵十賦を作るが如き才物であるから、その行文暢達理路井然練想頗る力を致し委曲を盡した名作で、或いは父竹山叔父履軒(竹山弟)の二人の関を経たものとの想像もされぬでもない。

しかし所詮は漢文體で且つ天文曆學の如き特殊部門の事象の表現や説明には專攻外の撰文者止むを得ないであらうが、記載が抽象的で門人名を擧げておらず、行文隨

處に難解を免れない、又當然乍ら近年發見の醫學上の業績も見られない。しかし所詮は永年通用の唯一傳であるから今これを原文を書下し、その中に略注解をつける。

剛立麻田先生之墓(大正五年十一月、贈從四位)

昭和四一年三月史跡指定

中井曾弘撰文—原文、浪速双書第十卷訪碑錄

寛政十一年五月二十二日(一七九九)剛立麻田君卒ス、年六十六(享保十九(一七三四)二、六生)葬既(ヲワ)リ、其子ノ直、石ヲ買ヒ其墓ニ誌(シル)サントシ其友人(中井竹山)ノ子、曾弘コレノ辭ヲ爲(ツク)ルナリ』(以上、撰文ノ由來)

曰ク、君諱(イミナ、本名)ハ妥彰(ヤスアキ)剛立ハ其字(アザナ)ニテ原姓ハ綾部ナリ、豊後(大分縣)ノ人、其祖父ヨリ以下、世々杵築(キツキ)侯(藩主松平)ニ仕ヘシガ君ハ支子(第四ノ末子)ナルヲ以テ家ニ居ル(出デテ仕ヘズ)殿毅廉正ニシテ精敏人ニ絶シ最モ星曆ノ學ヲ好ミ又醫方ノ言ヲ喜ビ困苦勉勵二十餘年、師受スルトコロナクシテ而カモ大カタ其法ニ通ズ、明和ノ末(七年カ)侯、特命シテコレヲ侍臣ニ列シ從ヘテ江戸ニ行ク、遂ニ大阪ニ行キ既ニシテ歸リ歎ジテ曰ク、「星曆ノ淵微ナル豈ニ爵祿ノ累アリテハ能クコレヲ窮メンヤ、且ツ祖先ヲ嗣ギテ君上ニ報ズル所以ハ吾ガ宗子(兄)ノ

在ルアレバ、我レ又何ヲカ爲サン」ト、書ヲ上(タテマツ)リテ仕ヘヲ辭スルコト三度ナルモ命ヲ獲ザリシカバ遂ニ亡シ(明和八年卅八歳亡命、藩ノ本籍ヲ脱ス)姓氏ヲ改メテ(祖先ノ麻田ヲ稱シ)大阪ニ隱レ(本町四丁目ニ住ム)醫ヲ以テ其家ニ業トシ而シテ益々星曆ヲ研究ス、後列侯其聲(名聲)ヲ聞クアリテ禮ヲ厚クシテ之ヲ聘スルモ就カズ、縣官(大阪ノ町奉行)モ亦之ヲ起用セント欲セシモ亦應ゼズシテ乃チ曰ク「我レハ吾ガ君ヲ棄ツルニ非ズ、我レ若シ又(他ニ)仕ヘナバ舊君ヲ捨ツルナリ、其レ誰レノトコロニ行カンヤ」ト、大阪ニ在リシコト廿八年ニシテ終レリ(以上、一生涯ノ略歴)

星曆ノ法タルヤ今古多端ナルモ君若キヨリ網羅シ盡シ了リテコレヲ天ニ驗シ合ハザルモノアラバ乃チ法ノ尙ホ粗ナルコトヲ知り、悉ク其書ヲ捨テ別ニ其術ヲ求メ専ラ測量實驗ヲ以テ本ト爲シ或ヒハ器ヲ執リテ中庭ニ露坐シ或ヒハ弧(コ、コンパス)ヲトリ机上ニテ分疎シ酷寒暑暑ニモ倦避スルコトナク、頭ニ枕セザルコト九年、其ノ術用成リ然ル後、優柔浸灌シ補綴磨礪(ロウ、みがく)スルコト又十餘年、凡ソ驗スルトコロハ一モ合ハザルモノナク、衆其ノ精確ナルニ服ス、後ニ清國ノ商船ガ西洋曆法ノ書二種ヲ舶載シ來ル、其ノ説、奇新密微ニテ神ニ入り、星工(星曆ノ専門人)傳ヘテ大寶トナス、而シテ君ノ發明シ論著スルトコロ悉ク之ト符合シ恰カモ西人(西

歐人)ハ向(サキ)ニ君ノ言ヲ聞キ之ヲ潤色スルガ如ク衆益々服ス、而カモ唯消長求食ノ二法ハ實ニ古今獨歩ニテ西人(西ヨーロッパ人)ト雖至ルコト能ハザルト云フ(以上、天文醫學ノ業績)

更ニ醫方ノ書モ亦多端ナリ、君若クニシテ包羅(總括)亦盡シテ常ニコレヲ人體ニ試シ(解剖實驗)其ノ理ヲ會得スルコトアルモ其ノ功(効用、實用)ヲ得ズ、又其ノ功ヲ得ルモ其ノ理ニ得ザルコトアラバ乃チ歎ジテ曰ク「其ノ功ヲ得ルモ其ノ理ヲ得ズ又其ノ理ヲ得ルモ其ノ功ヲ得ザルハ何レモ我レノ不明ノ致ストコロナリ、其ノ理ヲ得テ其ノ功ヲ得ザルハ是レ豈ニ眞ニ理ヲ得ルモノト云フベケンヤ、コレモ亦我不明ナリ、コノ事(實驗ニ依リ得タル事象)アラバ必ラズソノ理アルベシ、我レハ更ニ深討務白シテ其ノ理ヲ盡サン」ト、然レドモ星曆ノ務メ是レ急ニシテ之ヲ專攻スルニ暇アラザリキ、晩節ニ星曆ノ業概ネ成リ、乃チ曰ク「吾レ今ヨリ則チ之(解剖)ヲ專攻スベシ」ト、蓋シ大イニ論著セント欲セシガ而カモ病ニ罹リ次イデ大故(死)ニ至ル、衆惜マザル者ナシ(以上、醫學部門ノ業績)

祖父諱ハ道弘、父諱ハ安正(號綱齋)、妻藤井氏子無シ、直ヲ取リテ以テ嗣ガシム、三兄アリ、直ハ實ハ長兄安胤(號富阪)ノ子ナリ、(以上、父系)ケテ曰フ。王ノ日官、侯ノ日御ハ家言コレ執

り各々據ル處ヲ殊(異)ニス。

中國の昔周代の王室、その臣家たる侯國ら即ち封建時代に各々國で各々曆の専門官があつて、各々細密な曆を慎重に制定してこれを使ってきておる。

上天ノ載ハ洵(マコト)ニ微ニシテ且ツ淵(フカ)シ、天體の事象は實に深淵精微である。

彼(己)ノ子(ナルガ)之ヲ倒シ之ヲ顛(タツガヘ)ス 曆は東洋が古くすぐれており、彼の西歐羅巴人は誤つておると觀破す、

君茲ニ興リ(剛立が東洋のわが國に生れ)淵ヲ究メ微ヲ剖(ヒラ)キ晦(カイ、暗い場所)ノ灯ノ如ク紛ノ觸(クジリ)ノ如ク其辯論ヲ聞クニ客ノ郷ニ歸ルガ如ク 眞實根本を究めたのである。「くじり」は象牙の尖らせたもの紐の結ばれたるなどを解く時用う

維時丁己(寛政九年〔一七九七〕)大イニ堯政ヲ修メ令聞ノ薰ズル處ニ蒲車ニテ命ヲ將(モツ)テセシモ、君ハ起意ナク、乃チ其ノ徒(門人)ヲ拔キ(拔擢推舉ス)シガ其ノ徒續ヲ底(イタ)ス

寛政九年の前、天明七年(一七八七)、名君松平越中守定信老中に任じ謂はゆる寛政の治の善政(中國堯代の如き)をしき寛政五年退職隠退した(その頃伊勢桑名に轉封であつたが前封地を冠して白河樂翁と稱せらる)その良風のちに續けられ民間學者などの評判高い者に安車を

以て禮を厚うして召し出す様に命じた、剛立もその一人で召されたが君(剛立)は老年病弱の故を以てこれに應ずることを辭退して、門人の高橋(號東岡)至時・間(ハザマ)重富(號長涯)を拔擢推舉した、この兩人達は召されて江戸に下り師命を體して改曆の大業に力を盡し遂に寛政十一年の新曆を完成した、その前天明八年正月には讃岐高松から柴野栗山(邦彦)が幕府官立の昇平校儒官に召され更に同年六月には老中定信關西巡游大阪に來つて禮を盡して懷徳堂學主中井積善(號竹山)を旅館に召し忌憚ない世務の意見を聴き(これを筆録奉呈したのが草茅危言)後寛政十一年七月には竹山は一代の名著「逸史十三卷」(徳川家康天下平定の功業記事)を呈し賞を受けてをる。

噫君(剛立)ノ矩ハ政人孔(ハナハダ)嘉ミシ簞ヲ苜(ボウ)堂ニ錫(タマ)ヒシカバ群朋來ツテ慶ス、謂ハユル伊(コノ)人(剛立)ハノ天士望ムトコロナルモ今ハ夫レ逝ケリ、誰レカ嗣ギテ宗トナルヤ、言ノ朽チザル況ンヤ其ノ徒(門弟)アリ、其ノ徒ハアリト雖モ吾ガ(剛立自身ノ)病ヲ如何セン、

あゝ剛立の發見創作した規矩(キク法則)は幕府の政府當局者の嘉賞を獲て採用せられ、褒美としてあばら屋に住んでる剛立の身體をいたわつて敷物(テン、は竹にてあむ)を賜うたので朋友達が澤山來て祝ひ喜んでくれ



一點、東京 茂申小十郎藏

天風彩鶴欲追陪。回レ首富春憶釣臺。金鞍應レ繫武昌柳。黃菊甞同彭澤盃。懷橋夢將雲水隔。登レ樓坐入斗牛開。
 高樓各對倚門月。想向ニ鄉園ニ衣錦回。 綾・串二君將從レ公赴ニ東武ニ枉ニ駕草堂 三浦 晋(梅園)



凜冽風想歲漸深。殊憐讀史愛三分陰。生涯志業思剛述。須識良工多苦心。 右寄示三子讀史 蘭室 (脇愚山)

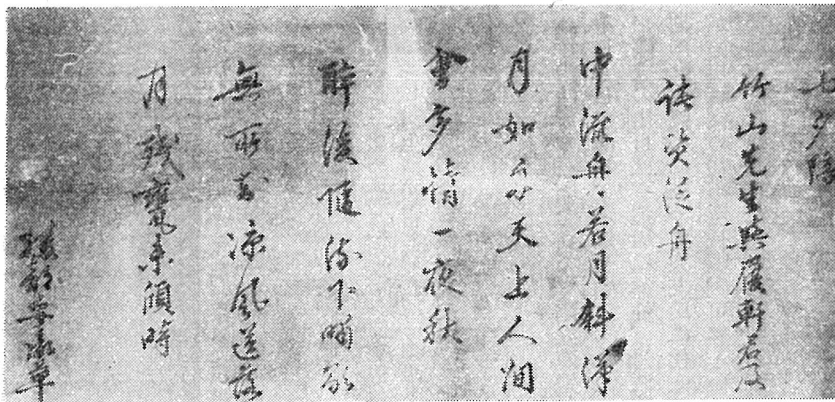
た、まことに剛立は宇宙の自然法則を研究し、眞理を知ろうとする人が切望する事象を明らかにしたのであるが、惜しくも亡くなった、この後誰れが肝腎の眞柱である剛立のあと嗣ぎとなるだろうか、しかし其發表した研究は永く世に傳わるのである。まして剛立には立派な門弟達がある、門弟はありますが剛立が病にたおれたことは何としてもとり返しがつかぬのである。

そしてここ東成郡淨春寺と云う寺に葬られ、そこには
 高き約四尺の石標を立てて剛立の遺骸を埋めた處の目じるしとしてある。(以上)
 剛立の出自は、遠祖は源姓、丹波國綾部の産で、鎌倉期に九州豊後に來って大友氏に仕えた舊族である。それが徳川時代の初め慶長頃、可春というあり豊後國の國東郡麻田莊に歸農した、これが即ち剛立の家祖に當り即ち九州豊後綾部の初代に當る。
 可春の子、二代道一、その子三代道弘初めて儒と醫を

以て杵築藩主松平氏に仕え、かくてその子五代安正（一六七六〔延寶四〕—一七五〇〔寛延三〕）に傳えた、この安正が即ち剛立の父で、若うして學を好み、京都伊藤東涯、江戸の室鳩巢、服部南廓に學び、特に鳩巢の説に私淑し、後に程朱尊奉といった學歷をつんで、藩儒となり藩主四代に歷仕し、世子の侍讀をも勤め、後に郡奉行の職に上った、花王園集・家庭指南を著録し、後者には大阪の竹山が跋文を記しており、その庭訓の狀が窺われる。

門人には同郷速見郡小浦生れの三浦梅園（名は晋、一七一三—一七八九）が出た、後代にわたるが梅園門からは大阪懷德堂の逸材と云われた脇愚山（名は長之、別號蘭賣、一七五九—一八一四）が出た、愚山は大阪に出で竹山に業を受け歸郷後その學才みとめられて熊本藩の辟に應じて、その藩學時習館に教えた。更に愚山門からは豐後の國、日出（ヒジ）の世臣で執政となり、傍ら醫學、蘭學、窺理等を修め、幕末多事の際、世務有用の學説を唱道した帆足萬里（嘉永五〔二八五二〕終七十五歲）が出ておる、北九州の隠れた世々篤學の名門綾部氏の家、この血統を繼承して、俊才剛立が生れたのは偶然ではない。

叙上、大阪との交渉は、當時、北九州東岸地區が瀬戸内海の舟便で、ワリ合ひ容易であつたにもよるのであらう。綾部家五代、即ち安正の長子、名安胤號富阪の墓には、中井竹山が次の如き長文を記しておる。



七夕、竹山先生、履軒君（竹山の弟）及ビ諸賢ト舟ヲ泛ブ（舟遊）

中流ニテハ舟八月ノ如ク。斜漢ニテ八月ハ舟ノ如シ。天上ニ人間會ス。多情一夜秋。

醉後ニ流レニ隨イテ下レバ。嘯歌ハ知ル處ナシ。涼風ハ落月ヲ送り。殘莖未ダ傾ケザルノ時。（秋ノ一夜ノ作）綾部安胤草

（懷德堂先賢墨迹）より）

（安胤〔富阪〕上阪中の作である）

中節先生綾部府君墓誌銘（竹山の詩文集、鏡陰集卷九に收む）天明二年壬寅の秋九月三日、西海道豊後の國杵築侯の世臣綾部府君卒す、その友人にて遠く本藩に仕うる三浦安貞（號梅園）がこの人の平素の行實を記しました履歴をしらべ「易」の九五の翼の語をとって中節先生とおくり名をつけたと云うことである。長男の佐が父の行狀一篇をつくり涙ながら「誰れかわが父をよく知ってくれておる人で文章を作ってくれる者がないか」と色々考へた末、遠い大阪の某（撰文者竹山即ち自分）に銘と文を依頼してきた、余は君とは中年からの交りで、以後略々隔年毎に會つたのであるが、お互い交りは大變深い、だから學問なく文章も拙いけれども、敢へてことわらずこれを引きうけて、即ちその一生の略歴をつらつら考へその中から要點をとり、そこへ余が實際見聞するところをまじえて書いて見た、君の諱（本名）は妥胤（ヤスタネ）字は伊承號は富阪通稱は文右衛門、源の姓、その祖先が丹後國の綾部に住み、（室町時代末、通稱可春、豊後國東郡麻田庄に移り來る（豊後綾部氏初代）曾祖父（二代）は名は道一通稱才藏。祖父（三代）は道弘、左兵衛、有終先生。父（四代）は名安正字は椎木通稱は進平。母は高橋氏その子男女六人、その長子が府君で、寛保三年（天明二年六十四歳の歿年から逆算し享保四年生れ、依て廿五歳に相當）祖業を嗣いで出仕し江戸に下り延享二年、父

が隱退して家を相續し、江戸藩邸に四年居って歸つた、寛延三年、外艱に會ひ、（何かの事件で、一旦職を免ぜられ後ゆるさる）寶曆中累進して郡奉行となり采地を賜つた、これは父の時代にこの職であつたところ故あつて免ぜられ、一旦采地を返したのが再び元通り復されたのでこれを頗る光榮とした、明和四年藩内に紛議起り安永以降、藩政亂れたので、藩命に依つて府君はこれの經理に執掌し、四度大阪に出で一度はその爲め江戸にも下り、その都度往復しその勞實に多大であつた、藩ではその功績を認めて祿を加増した、府君は實に二代の君主に四十年間勤續し謹恪剛直で終始變らず、その舉動に禮義あり、よく自分の正しいと信ずる意見を申出で、上下から内心は尊敬されたが、時に敬遠されることがあつてあまり榮達出來なく、その爲め、自分の抱負は十分に實現出來ずして終つた、この實情を知る者は殘念がっておる、府君は若くして聰慧で家學を受け繼ぎ精敏で、十歳で四書を讀誦し、長じては廣く諸書を読み、その中でも詩經を愛讀して一字をも誤らなく、また武藝をも修め最も槍術に長じ、十字劍法を小倉の大甘氏に、乘馬を加藤氏から習ひ、又笠原流の容儀作法を村上氏から教えられ、何れも皆上達した、寛保中、上京の間舊誼によつて、堀川の伊藤蘭グウ（仁齋の第五子）に漢籍を學び、あるいは字野明霞に詩を學び、また風竹亭（公卿で敬し

て姓を記さざるか)に和歌を學び、江戸に於ては父の知人の服部南郭に春秋を學び、また太宰春臺にも學んだ、傍ら高子式・鶉殿士寧に交つて經史や作文を修め皆交友睦じく、中でも南郭には最も親愛されたが要するに純な家學を專攻しておる。大阪では余等兄弟(弟は履軒)とは殊に親しくし、また在阪の片山北海・頼春水と交り(筆者同族の羽倉三峰子信郷〔東丸の弟の子〕とも詩友)公職繁忙の閑、屢々往復して交り皆からその雅量に感服された。常に内心を公平に保ち慈悲厚く、不幸な人には自分の衣服や食事を節してこれを救い、それが自分の身よりと疎遠な者にも分け隔てなく、其爲め家計不如意なことがあつても何等意に介しない、役所では煩劇な仕事をよく處理し、人からの贈り物を受けず清廉で、部下や庶民に信用を得、屢々疑獄を公正にさばいた。領内を巡視する時には、先ず孝悌の善行者をたづねて、これを上司に申し出で表賞せられる様に取り計らうという風で、常に下情に留意し、隠れた氣の毒な者を憐んだ。これらは亡父の遺志を受けたものである。亡父には「家庭指南」の著があり、(竹山此書に頼まれ跋を書く)この書は記事、簡潔、具體的で、府君の處世法は全くこの教えに基いたものである。藩では藩士の文武兩面の教育を府君に命じ、また藩主の二公子の教育をも託せられたが、何れもそれらに適した指導をなし、その感化は教育なき者や幼童を

も服従させておる。父君の死に會つた時、正しく三年の喪に服したが、しかも勤務を缺かず随分苦勞した様である。もとより家計は節儉で、妻子によく分を守らしめ、雇人等に過失あつた時も諄々教えさとしてこれを罪するが如き事をせず、閑暇には聖賢の遺書を讀み、書字を習い、吟詠を趣味とした。初め郡宰(郡奉行)となつた時、定員一人で部下がない、藩でそれでは手不足だろうと心配し誰れかを附屬せしめようと思つたが適者なく府君にこれを選ばしめようとしたが、初めは固く辭しておつたが再三の勧めで遂に「然らばこれには、地位や資格やを問はず、人物であれば貴賤貧富を問わずしてよいなら應じよう」と申し出た。上司これを了承した。そこで一農家の小串政俊という者を候補に選び、これを口を極めて推舉した。上司も止む無くとり上げこれを附けることに定まり、給祿や地位も府君の意見通りとしたところ、果してその手腕打つてついで領民の信用を得た、ああこれは中國の昔の公叔文子の文を爲したのと同じ(中國の論語、憲問十四の、公叔文子が優良の臣を拔擢した故事、下にも出づ)時世に古今の差、地の内外の違いがあるが、おのれを捨てて君に仕うる事を主にしたのは同じであり府君が全く選ぶに人物を第一としたことが知られる。余嘗て大阪の西町奉行京極伊予守(名は高主)に招かれ講義の時この文子升公の章について説明したら感

嘆されその姓字を書かれた。その後、府下の藏屋敷等で問題起れば（駐在交代期の嚴守の件の如し）官命じて督責したこと度々であり、杵築藩もこの弊あったが府君力を盡しこの期日の嚴守を守らせた。これは安永年間のことであつた。

府君は大島氏を娶り男女各々三人を生み、長男の佐があとを相續し次男守、三男の直は他家の養子となつた（直は剛立の養嗣）三女子は皆嫁いでおる。君は急病の爲め二日間床について逝き享年六十六、藩内では皆哀悼した。その墓は藩内の速水郡中原山の祖先の墓域である。銘は次の通、

在世の間、常に起居は古人の風に倣ひ、俗世界の中に在つて昔の聖賢の教えを手本とした。文武の學術を修め、一番に推重せられ、父祖以來のよい家庭の風を繼いだのは府君であり、中原山に墓石を作り、それに偉蹟を書いておく（以上）

諸處に注解をしたから説明を省略する。この兄、富阪は弟剛立より十七歳の年長で撰文者竹山より十三歳長じた。この墓文、頗る委曲を盡し、長文丁寧再三、縷々説き來り、マコトに碩儒竹山が亡友富阪を追偲するの情、躍如たるものがある。

二、剛立の業績

懷徳堂と獨創科學者麻田剛立

この項には剛立の天文、曆學及び醫學分野の業績を略敘する。

元來曆は古く未開時代に既に考案されたもので、わが國の古語の「日ジリ」に中國漢字の「聖」をあてて主權者の天皇を象徴しておるが、「日ヲ知ル、シロシメス」最高道徳者であるべき君主が國を統治する爲めの方途のメドに、最高神聖の語訓を偶意して、なるべく正確な天體星宿の運行を觀察追究し、これを軌準として定めたもの、それが形式化實用化されたものが曆（コヨミ）で、これに依つて一般國民の日々の行爲が順序よく規正され、平和に治まつて行くという頗る重要なもので、かの中國の經書の中の古史「春秋」に「春、王ノ正月」の用語があり、當時の王室の周の王の制定した曆なることを明示しておるのである。現在、種々の文書の終りに、元號月日を一字下げて字を小さくして概ね書かれてあるが、中國の碑文や文書を見ると、左様な年號月日は、本文と同じ大ききで文字も下げず、謂わば大書しておるのを見て、曆というものが重視され、年號が主權者である國王天子の制定したものであるから、これを慎重に取り扱い謹書しておることが窺い知られるのである。

古いことはおくとして、わが國の曆法はムロン善隣で先進の中國から他の文化と共に移入されたものである。そしてそれは永い間、朝廷の官、中務省の中の一寮、陰

陽寮に於て掌られてきたことは「令」(リョウ)に明示されておる。令の義解(ギゲ)に

陰陽寮 頭一人、天文曆數、風雲ノ氣色ヲ掌ル

の條文があり、深淵で不可解な天行の變異による迷信行事をも掌つたが、そこに曆博士一人、曆生十人等あり、この曆は實務で、平安初期、賀茂氏が初めて曆博士となり、初め陰陽頭、天文博士をも兼ねたが、後天文道は安倍姓に傳え、要するにその後、曆については陰陽道中の一事務としてこの兩姓が相承受け継いだのである。そして鎌倉以後、政權武家の手に移つてからも、同じく室町時代を経て徳川の初世まで、朝廷の政務として、これら朝臣の世襲家に依つて曆法の術は取り扱われてきたのである。

戰國亂離を経て太平の基が成つた徳川時代、一般文化漸く開け且つ廣く復興し、それが上下階層に行きわたるに従つて、この天文曆學の研究も、民間人の手に依つてなされた。この研究に於て殆んど劃期的な業績を樹てたのが保井春海である。

春海は京都生れ(寛永十六〔一六三九〕)、本姓は藤中氏、縁あつて江戸幕府基(ゴ)所四家の中の一家安井算哲の養子となり、後に保井と改め父の職を繼ぎ、春海と號し、天文曆學を修め自ら天體觀測を行いその器械をも造つたと云う。その名聲は徳川幕府當路にも聞え、寛文十

一年(一六七二)五代將軍綱吉に召されて講説コウゼツした。かかる努力が追々實を結び、上表など再三の意見具申に依つて、貞享元年(一六八四)の改曆に當つては、京都の世襲家の公卿土御門(ツチミカド)家(安倍姓)が江戸に下向するなど、その苦辛折衝迂餘曲折を経て、春海は始めて幕府に作られた曆職天文方の初代となり、謂わばその實際事務が江戸に移り、京都の世襲家はその完成後これの認證に當り、天皇に執奏し、勅裁を経るといふ、謂わば敬せられてはおるが、名あつて實なきロボットの存在の觀を呈するに至つた。だからわが國の改曆等即ち國曆制定の劃期的現象で、この主動者は實に春海その人でその功眞に偉大といふべきである。春海は神道を山崎垂加に受けたので、同門の伏見稻荷社家の大山爲起とはかり、自撰の長曆にうやうやしく署名して、伊勢大神宮や稻荷等の大社に寄進しておる。

ついで名君八代將軍吉宗となつては、將軍自らが天體觀測を試みるという如き熱心ぶり、元文五年には有名なサツマ芋先生青木昆陽、また伊勢人野呂元丈がその旨を受けて和蘭學を修め、従つて曆學に於ても、公然西歐の曆法書の移入を見るに至つた。この少し後に出たのが即ち剛立である。

剛立は享保十九年(一七三四)二月六日、杵築に生れ、幼時から性犀利俊敏、如何なる動機からか知る由ない

が、特に星や空に興味を感じ、未だ春に負われる頃、泣いておつても星の話をするど泣き止んだとの挿話があり、七歳の時、爪で椽側の板に太陽の日ざしの印をつけ、冬至まで日足が追々北へのびて行き、それが夏至まで南方へ追々縮まって行くことを観測して人に話したことなどが唯一の語り草として傳つておる。全く神童と云うべきで、要するに子供の時から、空や星の虫であったのである。それが年を重ねるに従い、その観測実験も追々具體化機械化したのである。その未だ郷里豊後にあるの間、日月食を實測した記録が東京天文臺に傳わるが、それを抄記すれば次の通である。

寶曆七、十二、十五（廿六歲）、月食（注記略、以下同）。 同十三、九、一、日食。 明和二、七、十四、月食了る。 同三、正、十七、月食。 同四、六、十六、月食。 同五、十一、十五、月食。

これは唯日月食の實測を止めておるのみであるが、かかる観測は到底肉眼のみでなし得るものでない、それには諸設備特に器具機械、望遠鏡、渾天儀、更に時計の如きを要したので、かかる準備、下ごしらへについても種々の案出がなされ、工作的勞力がなされたのである。時計、望遠鏡は明らかに創作がなされておる。あるいはレンズ磨りもやったであろう。

この郷里にある廿歳前後頃からは、好むところの書籍

殊に天文や醫學部門のものを搜し求めて、それを貪り讀んでおる。墓の文に

困苦勉勵二十餘年、師受スルトコロナクシテ而カモ大方ソノ法ニ通ズ

とあるのは即ちこれを述べておるので、この間、約後半は藩醫の職にあつたが、なお閑あれば讀書と、或いは不十分な機械を自作して天體觀測などを試み、そして自分の一生間の研究のメド計畫を立てた様に見られる。この間の天明五年六月朔、剛立には父綱齊の遺弟の三浦梅園からの來書に

寶曆年中、子（剛立ヲ指ス）猶ホ藩ニアリ頒曆ニ食（日食）ヲ記スヲ失フ、子、獨リ曰ク「九月朔、日食ニ當ル」ト。子ガ弱冠ナルヲ以テ人多ク信ゼザリキ。期ニ至レバ果シテソノ言ノ如ク違ハズ云々

とある如き創見を以て同學を驚嘆させておる。これは寶曆四年のことである。

剛立一代に於けるこの面の業績は要約して、大阪に出たからの門弟高橋東岡が次の如く述べておる。東岡は剛立の在阪中、大阪での幕府から差遣任命の最高の官、「城代」（大阪は幕府直轄即ち天領で、藩でなく従つて藩主なく城主相當の官の代理の意、これには概ね五萬石以上の徳川譜代の大名が充てらる）の次位の定番職（ジョウバン、概ね一萬石程度で二名）所屬の代々大阪定住の同心職の家の生れ

で、この學を好み、剛立の業を受けた。通稱作左衛門名は至時、號東岡である。東岡は地元大阪の質商の老舖（シニセ）十一屋、間（ハザマ）五郎兵衛、名重富、號長涯と共に剛立の同門お互い切嗟の間柄、この二人は寛政の幕府改曆に當り、師剛立の推舉で、師に代つて江戸の天文方の職に就いて改曆に力を致しこれを成功させたのである。この大阪人間長涯も幼少で既に天文に興味を寄せ十二歳の時、天文を觀測する爲めの天體を形示する渾（コン）天儀を試作したという如き天才の天文學者である。それが東岡と同じく剛立に入門して大成したのである。

東岡が師説をまとめ作った「増修消長法」の序文中に前略昔からの曆書の中で、かかる精しいものはない。これまでまとめ上げるのに如何に苦辛し努力がなされたかが窺い知られる。近頃中國から移入した「曆象考成後編」やオランダから入貢した西歐の曆書を見て、これをそれらの外來のもの比べて見ると全く不思議な程、師の剛立が獨力で工夫し作ったものに符合するところがある。これは全くの暗合で感心する外はない。西歐の曆術は實に精しいが未だこの消長の法あるを聞かない、獨りわが國にはこれがある。實は自分は曆學では、今迄は我國は西歐のそれには太刀打できないと思つてをったが、恐らくこの消長法を見せたら我

國の曆學が進歩してをる一面を誇るに足るものがあり又かかる曆を作つた日本人がある事を聲を大にして語るに足ると思う（意譯）

と書いておる。消長法とは天體の運行に依る長短、大小、盛衰、伸縮等の變化を示す爲め抽象的總括的に使用した語で、これの法は即ち屢次永年の觀測實驗の苦辛に依り歸結を求める方法手段運算法で、これが曆作成の基礎であり途中の工作であり、勿論この種の考究は、既に中國宋代から更に下つて西歐に於てもなされておるが剛立はそれらにあき足らず更に掘り下げ前人未到の域に及んでおるのでこれを東岡は激稱したのである。

實に剛立のかかる業績は全く獨學で師尙なく、古書を盲信せず永年の涙ぐましい實驗の結果の集積せられたもので、これが彼れのこの道研鑽の殆んど集約大成の記録と云うも過言でなからう。出版後、間もなくして彼れが麻田流の天文學の名聲を博したのは眞に當然で、前掲の中井撰文にも、その創見の精緻を消長求食法に要約して當時の西歐學説も及ばなかつたことを特筆しておるのは抽象的ではあるがよく實情に即した批判である。

この書は寛政四、五年頃即ちその晩年に漸く一應まとめられ尙お生を終るまで修補に努めた様でそれが稿本として殘されたのである。

そしてかかる研究が高橋・間の二門人の手に依り増修

され、寛政改曆に際し重要な資料となり、その一本が上述の廷臣の曆官土御門陰陽ノ頭泰榮の許にも呈出されておる。かかる殆んど畢世の業、未曾有の研究成果を擧げるまでの剛立の不休の實驗實測等の苦辛の一々は恐らく想像以上で、到底筆に盡せるものではないのである。

剛立の遺著として傳うるもの、前記の消長法の外、實驗録推歩法（天明六、在大阪中、四十六歲）西洋曆法考（寛政元）がある。該博なる剛立一生の研究は斷じてこれら二、三の筆述に止まるものではなからう。

幸いにしてその研究は、出藍の譽ある上述高橋・間の二門弟にさながら繼承せられ、二人は師剛立の推學に依つて寛政改曆と云う國家的事業に參畫の爲め江戸に下つて、立派にこれを完成し、十二分に師名をも顯表するに至つた。剛立贈位の榮光は多分はこれら門人の師說傳承によるのである。なお又、この二人よりは年長の剛立門、大阪町人、兩替商升屋（マスマ）の番頭で好學且つ博學の山片芳秀（號蟠桃）これは懷德堂中井竹山・履軒兄弟に儒學を承け、その學的論理を基とし地理、天文、經濟、蘭學にまで思ひを馳せ奇書「夢ノ代」十二卷（日本經濟双書二十五卷に收めらる）を著わし、その中には剛立の師說を擴充して有名な地動說等を發表したのである。以上、後にもことわるがここには唯、天文曆學の一端に止めて次に醫學について述べる。

剛立の醫學については、さき頃本誌に拙稿「懷德堂と醫學また醫家」の題名で、寄せておいたから、再びここに繰り返さず、唯その要旨のみに止めておく、即ちそれは中井履軒（別號幽人）自筆の遺著「越俎弄筆」についてである。

この書は安永二年履軒四十二歳の筆録で、剛立は四十歲、大阪に出て未だ數年内の事で、剛立が大阪で醫を開業し治病に従事の傍ら天文研究の閑に、醫學特に人體解剖に思いを潛めこれを實行した實相を履軒が見て、これの説明を啓蒙的なわかりやすい書下シ文で記し更に文意を助ける爲め自ら密圖を畫いたものであり、履軒がその旨を序文に書いておる。謂わば剛立の解剖業績を履軒が代つて書き記したものである。

この書は既に早く醫學界には知られており、儒者履軒の著なることも序文署名で明らかであつたが、これが剛立の學說なることは知られず過ぎてきた處、解剖學專攻の日本醫史學會小川鼎三氏（大分縣人）に依つて、その内容が再検討され、その所論の卓越せることから、序文中の「豊國麻子」に着眼し、それが「豊後國人麻田剛立」の略なることを看破して、ここに始めて、叙上の通り確認を得るに至り、今迄は往々履軒その人も唯書籙（ロク）中において經書の訓詁（コ）注釋に消光する頭儒視されておつたのが、かかる新進の實證科學にも理解

があつたと見直されたのである。更に剛立は前出の父の門弟年長兄視の郷里同學三浦梅園に數回にわたつて、犬猫の生體を剝殺し、直後に解剖を行つて知り得た詳細を報じたことが、梅園の著「造物餘譚」に載せて紹介せられておる。剛立の醫學は天文曆學と同じく鋭い創見に富むものであるが、自らが著録を傳えず、しかし中井、三浦の二賢によつて幸いに紹介せられたのである。

剛立は明和八年卅八歳、その學の大成を期して遂に大阪に出た。その前年頃、剛立は藩主に従つて江戸に下り、歸途、大阪に立ち寄つておる（碑文）。或いはその際、兄の心友竹山らに、事前に、自分の早晩の出版について衷情を披瀝して希願したかも知れぬ。要するに彼の出版は頗る慎重に考へぬいた上でなされた様である。

前年、私は學會に於て、剛立の隨分長文の一消息を紹介したが、その用語行文、頗る丁寧、よくアテ名人の心情を忖度してあますところないといった風で、その性情の一斑を窺知し得たのであるが要するに、彼れが門人達を誘掖指導した姿勢態度も、これ又腹藏なく祕を開いて懇切そのものであつたらうと想われる。

剛立がその住を大阪に選んだことについては種々考えられる。

大阪は當時でも殆んど全國第一の商都、商工業の盛な

處、また生産地で、且つ物資集散の地である。彼れの最も要求する物件は、天文觀測及びこれに附帶關連の器具機械である。屢々微小な機械部品を要したのである。當時に於て、かかるものを容易に入手し得るのは、恐らく大阪の地が最適であつたらう。

近頃、自動車産業部門で缺陷車が話題にのぼる。コレは思うに、わが國の部品産業がなお跛行的で、ムシロ廉價微小な部品の不足から起るのである。前年ワレラ事變應召で、北支北京にあるの際、車廠に多くのカーが永く停頓放置されておるのを見、實情を聞くに、その頃は未だエンジン部品の一部の生産が遅れておつた様で、それが破損すれば、その補充入手が困難で、かかる無様窮情を露呈し、恐らくこれが延いて戦力の推進をさまざまたろうと思われたが、苟くも機械の整備には簡單な小部品の整備を要すること、今昔同じであり、剛立の時代には、郷里の邊陲豊後では、これらの入手が困難であり、かかる面からも商都大阪を最適と選んだのであらう。

この出版は明和八年で、彼れはここに定住すること二十八八年遂に大阪で終つた。この明和八年には、後の門人、高橋東岡は未だ八歳、間長涯は十六歳である。二人が入門したのは早くも五年乃至十年の後であらう。郷里實家の兄、安胤は剛立出版約十年の後まで存命であつた。これも恐らく剛立に後襲なからしめた事であらう。

剛立は幸いにして醫家であり、出版後、本町四丁目に業を開いて、一般病患の請に應じて治療に任じ、餉口の資となし、その餘は擧げて天文の研究面に投じたのである。

更に彼れが大阪の地を選んだ重因は、この地に堂々官學と目すべき浪華府學懷德堂があり、そこには恰かも彼れの父兄郷黨の信頼した大儒、中井竹山・屢軒兄弟があったことで、これが彼れの精神面に如何程、強い支援推進となつたかは想像に餘りある。惜しくもその詳細を傳えないが、その一、二の證左をあげる。

竹山は、その畢生の大著「逸史」に「彗孛」(スィハイ)即ち彗星について剛立の卓説を次の如く引用紹介した。

逸史氏(著者竹山)曰う、友人麻田剛立曰う、「彗孛は實は一つの星にて、形を天に成すは客氣の致すところにて一時凝結の物に非ず、恒星と同じく旋ると雖、其行は獨り年を積み低昂す、平常は微小にて辨ずべからず、漸く(漸次追々)低ければ則ち日を受けて芒(ホウキ)を發し、日の遠近に隨いて彗となり孛となり數旬漸く昂り光芒益々銷するなり、唯隱顯の年限日數未だ考へ易からずとなるのみ、凡そ客氣上升の類は凝聚指すべしと雖、元より形質なき物、天と同じく轉ずるの理なく、唯彗孛は嚴然として眞形あり、故によく附麗して運旋するなり」と、この説は絶妙、蓋し利

・湯・庵(西歐の天文学者三人)遊(中國の明朝人同上)

—頭注あり略—の輩の推究は精測にても及ばざる處、これ世の蔽惑を解くに於ても尤も明確たるなり、剛立は南豐の人、來りて浪華に家し天學を以て著稱す、予嘗て舊聞を述べ以て原論を立てしが後剛立氏の娓娓の譚を聴き深くその至當に嘆ず、云々

これは要するに、彗星は眞形ある微小な一遊星で、それが運行の際、太陽の光線をうけ、その遠近に従うて箒狀を見せる。その箒は外氣で固定物ではない。唯その顯われる時期、隠れる時期は現研究段階ではわからぬ、と自らの觀測で考察した限りを解明した、この剛立の明確な所見を竹山が書中に紹介し、これに賛意を表したのである。即ち古來永くこの星の出現を不吉の兆となすが如き迷信説の蒙を啓いたのである。

「逸史」は竹山畢世の大著、徳川二百年の太平の基を開いた初代將軍家康の一代を述べた書、謂わばこの書は山岡氏の現代版家康傳の先容の觀がある。そしてこの書は、一本を將軍に呈して嘉賞せられ、その後、書院に於て傳寫して教材に用い汎行せられた名著、後年ではあるが、嘉永元年、竹山外孫の書院最後の名教授並河華翁(名は朋來、初號寒泉、明治十二終八十三歳、贈正五位)によつて版行せられ、明治後には日本經濟双書(大正三、龍本政一編)中に抄録本がおさめられた。要するに

この書中に書院學主の著者竹山が剛立を友人としてその卓説を紹介したのは蓋し當時の大きな推學である。

次には竹山の弟、履軒の剛立の醫學智識の代筆著録というべき「越俎弄筆」である。これについては前述した。更に竹山の子、履軒の甥の曾弘(蕉園)は剛立の死後、その需めに應じてその墓碑に文を記し銘を系けた。

要するに剛立は中井三人の名儒によって後にその名及び業績を傳え得たのである。

以上は去る昭和四十二年十月即ち次述の墳域重建完成後醫學學會小川會長と共に、招かれて懷德堂秋季講座に出講の際の拙話を整理したものである。剛立專攻の學はワレラ門外漢には諒解困難であり、唯以上は、諸書の説述を熟讀咀嚼し、諒解し得る限度のことに止めた。哲人剛立の傳としてはもとより不備なものである。

剛立後日篇

懷德堂師儒中井家は筆者重縁の家であり従來からこの學堂については頗る關心をよせてきた。戦前東京において故入澤達吉翁の紹介で日本醫史學會に入り、戦後、阪神にあるの間、同會關西の領袖中野操氏と屢々この醫家剛立についても語り、特にその墳墓が戦災での壊破を嘆いて、一再ならずその復興について話合つた。

その後、東京に移つたが、偶然中野氏の紹介で、剛立

門、間の裔羽間氏と會見、氏の剛立墓再建の企畫を小川會長と共に聞いた。

これ迄、私はフシギな程先哲墳墓の修復に關係してきたが、現行法によれば墳墓の所有權は、祖先の祭祀をなすべき者(即ち子孫)が承繼すべきである(民法八九七條)とあり、これを無斷で處理することは、後年萬一の物議の程も考えられるので、この場合、これを剛立の兄富阪安胤の綾部家にはかり(安胤は五世、現代十二世は前衆院議長健次郎氏)その快諾を得、更に同家からは、永年の剛立墓の護持に對し感謝の寸志の寺納もあつた。大阪市内には二、三剛立類似の先哲墓があるが、中には裔孫知られない儘、無縁處理で片づけられたものがある。それを考えると剛立墓は直系の兒孫は、養子、直で死絶したが、幸いに寺の護持よろしく壊破の儘よく原形が保存されておつたのである。

時恰かも大阪市の史跡指定の既定計畫の順が剛立に廻つて來て次の如く剛立墓が史跡に指定せられ寺門前に次の石標が建てられた。これは、仄聞によれば市からこの方面の事業受託の近畿民俗學會の醫家澤田四郎作氏の配意により中野氏及び史談會後藤捷一氏らの支援もあつた由。

麻田剛立墓所(高さ約一米二七、曲尺四尺二寸。〇米二三角、みかげ石材、臺つき)

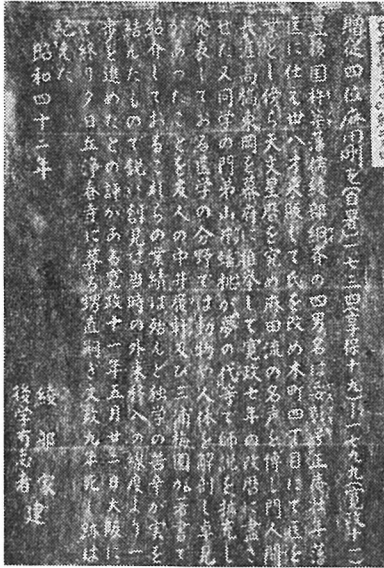
側面に昭和四十一年三月 大阪市建つ

右側面には三行にわたり剛立の出自生没年等が刻された。ワレラ後學に思を致す者にとつてはの顯彰も促進示唆される思い有難いことであつた。

その後迂餘曲折を經、地元大阪では同學藪内清氏らの盡力により、墓域は羽間氏發意の原墓（中井蕉園撰文）が復元し、別に綾部氏らの名を表し、わかりやすい現代文の一碑石が建てられた。この文面は最初白紙でたづねた際の、綾部家側の意見を參酌したものである（寫眞）。

かくて同四十二年五月廿一日、寺で除幕法要が修められ綾部氏嗣、正大氏、天文學會有志ら東京から小川會長が代表して參會した。

またこの際、寺に於て剛立の嗣直の墓石も發見せられ



これも重建せられた。この直は養父死後父の庇陰で問らの世話も受けた由、不幸その後は死絶したのである。また剛立は第四子で長兄は妥胤（富阪）即ち剛立との間に剛立には二兄がある。第二子是小串家養子の妥三、第三子は妥廣で、この二人も同じく杵築藩に仕えたが、何れも江戸在勤中若死し、現在台東區下谷二丁目紫雲山英信寺に葬つたことを知り、ついで弔問した處、墓石は傳らざる左の通り過去帳の記載を見た。

妥三、元文四、五、十三死、年齢不知斯心方靜信士。

妥廣、寶曆六、八、十七死、二十八歳、觀月幽玄信士。

のちに聞けば、小川氏も、同郷の因縁あり前年訪寺した由、縁あつて筆者は、この剛立墓重建にいささか參與し、微力を致した。なおここに、この參與に先だち、これについて私に力づけた一篤學の故人がある。それは東京天文臺の文部技官兼東大講師故前山仁郎である。

技官は東大出、曾て小家に元弘版曆を傳うを聞き、東大史料の桃氏と共に兩三度來訪、更に寫眞を撮影し、その熱誠にヒソカに感激した。（この處理については、後に雜誌「日本歴史」に桃氏寄稿）後日、私は技官を三鷹天文臺に訪ねたら、自ら二六インチの望遠鏡ドームに案内され、その觀測について懇切に説明せられ、月の觀測が天體智識の占める重要度を知り、更に文庫に於ては剛立や高橋の遺書の古文獻を披見説明せられた。その際、私が剛

立について話したら、技官は、剛立の天文曆學については、上述の郷里小野の剛立傳や大谷亮吉著「伊能忠敬」中の記述等があるが剛立の斯道面の深い造詣の程は、殆んど測り知れないものであり、その真相を窺知し得る文書を傳えないのは頗る遺憾であると、口を極めて惜み、その墓域の修整を衷心喜び、その完成を期しておった。この斯面專攻の篤學の言は強く私を打って、イヨイヨ剛立の顯彰に力を致すべきであると痛感した。しかるに不幸この篤學の技官は昭和三十八年八月九日、同學と共に越中（富山縣）高岡市の北の新湊、高樹文庫に、算法學者石黒信由の遺書探訪の歸路、急病發し遂に輕井澤病院で、四十九歳を一期に不歸の客となった。剛立の墓域重建成るの日、ヒソカに前年の技官の言を追懷した。技官汝後、上司であった廣瀬天文台長ら同學知友達が天文月報に記した追想文を見ると

技官は職にあるの間、特に先賢（剛立ら）が苦學力行、西洋天文學を研究理解移入した經過に深い關心を寄せ、この方面の研究に盡した諸先賢の事跡並びにわが國曆法史の資料文獻の博搜につとめた。技官程、曆法史の資料文獻の所在に通曉した者はなかった。云々と述べてある。中道に殞れたこの篤學技官の死を惜むと共に、先賢剛立の遺蹤が後學によって追究闡明せられることを衷心希願する。

（中井後裔・醫史學同人）



前山仁郎技官

ヨーロッパ八ヶ國訪問記

堂友會員 土屋 隆 一

羽田を飛立ち八時間、アラスカで給油し翼を休めたオランダ航空DC8型機は、我々日本の保護司を乗せ再びアムステルダムに向ふ。水山、氷河の地球最北は極端には、オーロラの中空を宇宙旅行でもしているかのやうで凄く美しい。

更に十時間を経て首都アムスの現代世界一を誇るスキーボ空港に到着し、次はスイス旅行。會社の企画では二階付の豪華なバスで、ヨーロッパ八ヶ國を駆け巡るのであって、先ずヒルトンホテルで一夜を過し、早朝より水都アムスの街を見學、レンブラントの美術館や市名所を訪ね、天井ガラス張りの觀光船でのベニスに似た周遊に一同楽しさを満喫した。アムスとはローカル色豊かに近代美を兼ね備へた日本にもよく似た都で、國民は實直でよく働き物價は安し旅の安らぎを感じる。夜は特殊な花火線香料に舌つつみを打ち、翌朝は伊太利ローマに向ふ。

（一〇一頁下段へつづく）